

福岡市埋蔵文化財調査報告書第549集

多々良込田遺跡 IV

- 第7次調査報告 -

1998

福岡市教育委員会

多々良込田遺跡 IV

- 第7次調査報告 -



遺跡番号 TTM-7
調査番号 9611

1998

福岡市教育委員会



卷頭写真 B区全景（西より）

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

今回報告します多々良込田遺跡群7次調査では多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜り、心からの謝意を表します。

平成10年3月13日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本書は東区多の津2丁目地内における福岡都市高速道路4号線建設事業に伴い、福岡市教育委員会が平成8年度（1996年度）に実施した多々良込田遺跡群第7次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
4. 製図は長家、山野妙子、戸畠智恵子が行った。
5. 遺構写真は長家が撮影した。
6. 遺物写真は長家が撮影した。
7. 遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は掘立柱建物（S B）・溝（S D）・ピット（S P）である。
8. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
9. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21'西偏する。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。
11. 本書の執筆・編集は長家があたった。

遺跡調査番号	9611	遺跡略号	TTM-7
調査地地番	東区多の津2丁目地内	分布地図番号	19-0074
T. 事面積		調査対象面積	1,980m ²
調査実施面積	1,280m ²	調査期間	平成8年5月10日～平成8年8月9日

本文目次

I. はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査体制.....	1
II. 遺跡の立地と環境.....	3
III. 調査の記録.....	3
1. 調査概要.....	3
2. 遺構と遺物.....	7
3. 小結.....	16

挿図目次

第1図 調査区位置図 1 (1/80,000)	2
第2図 調査区位置図 2 (1/5,000)	4
第3図 調査区位置図 3 (1/1,000)	5
第4図 調査区全体図及び土層図 (1/200、1/40)	6
第5図 SB001、SB002 実測図 (1/40)	8
第6図 SB003 及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	9
第7図 SD004、SD004b断面図 (1/40)	10
第8図 SD004 内井堰実測図 (1/30)	11
第9図 SD004 出土遺物実測図 (1/3)	12
第10図 SD005、SD006、SD007、SD008 断面図 (1/40)	13
第11図 SD005、SD007、SD011 出土遺物実測図 (1/3)	14
第12図 SD011 実測図 (1/40)	15
第13図 その他の遺物実測図 (1/3)	16

写真目次

- | | |
|------|--------------------|
| 卷頭写真 | B区全景(西から) |
| 罪写真 | 作業風景 |
| 写真1 | A 区全景(西から) |
| 写真2 | A 区検出掘立柱建物(西から) |
| 写真3 | SB001 ・ SB002(南から) |
| 写真4 | B 区全景1(西から) |
| 写真5 | B 区全景2(西から) |
| 写真6 | SD004 上層 |
| 写真7 | SD004 内井堰1(北から) |
| 写真8 | SD004 内井堰2(南から) |
| 写真9 | SD004 内井堰3(西から) |
| 写真10 | SD004 内井堰4(西から) |
| 写真11 | SD004 内井堰5(東から) |
| 写真12 | SD004 出土編み製品(南から) |
| 写真13 | SD004b出土鉢 |
| 写真14 | SD007 ・ SD008 土層 |
| 写真15 | SD011(南から) |
| 写真16 | SD011(西から) |
| 写真17 | SD011(北西から) |
| 写真18 | 出土遺物 |

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成6年11月15日付け、福北福工第214号で福岡北九州高速道路公社福岡事務所工務課長より埋蔵文化財課長宛に東区多の津1丁目～3丁目地内での福岡都市高速道路4号線建設に関する「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」が提出された。（事前審査番号6-1-70）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である多々良込田遺跡群（分布地図番号19-0074）に隣接しており、埋蔵文化財課では審査及び平成7年3月23日～3月31日の期間で試掘調査を行った。この結果申請地の東側でピット・溝の遺構が確認されたため、平成7年3月31日付け、福山市教理第604号で遺跡の存在する旨を回答し、埋蔵文化財の取扱についての協議を依頼した。これを受けて両者で協議を行ったが、遺構の確認された部分が構造上掘削の伴う部分に大半が含まれるため現状での保存は困難となり、遺構が確認された部分については全面発掘調査を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。以上の協議を受けて委託契約を締結し発掘調査・資料整理を行うこととした。

発掘調査は平成8年5月10日～平成8年8月9日の期間で行った。調査対象地は1980m²で、調査面積は1280m²である。また遺物はコンテナ32箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、福岡都市高速道路公社福岡事務所、人間工業株式会社の皆様には調査についてご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 福岡都市高速道路公社福岡事務所

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第2係長 山口謙治

調査庶務 第1係 西田結香

調査担当 第2係 長家伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 小川博 村本義夫 安元尚子 小路丸嘉人 平本恵子
永川優子 指原始子 花田則子 池聖子 大曾輝子 吉村智子 小池温子 中村幸子

増田ゆかり 草場恵子 高津千尋 岸原千秋 小路丸良江 今林加津江 山野妙子

整理作業 林田憲三 井上かおり 太田次子 石谷香代子 星野明子



第1図 調査区位置図 1 (1/80,000)

II 遺跡の立地と環境

博多湾沿岸部にはこれに流れ込む河川の堆積作用により大小の沖積平野が形成され、博多湾に向かって突出する丘陵によりそれぞれが区画されている。多々良込田遺跡は三郡山地から西流する多々良川・須恵川・宇美川の冲積作用により形成された船屋平野の左岸、沖積微高地に営まれた遺跡である。現状では河口部まで4kmの位置にあるが、元寇防壁、周辺の試掘調査、文字・絵画資料による旧地形の復元想定によると、本遺跡の西側直前から河川が開き、内海が大きく湾入していたと考えられている。また湾に面しては箱崎遺跡群がのる砂丘が南北に舌状に伸び河口部を閉し、後背には広大な湿地が形成されていたようである。

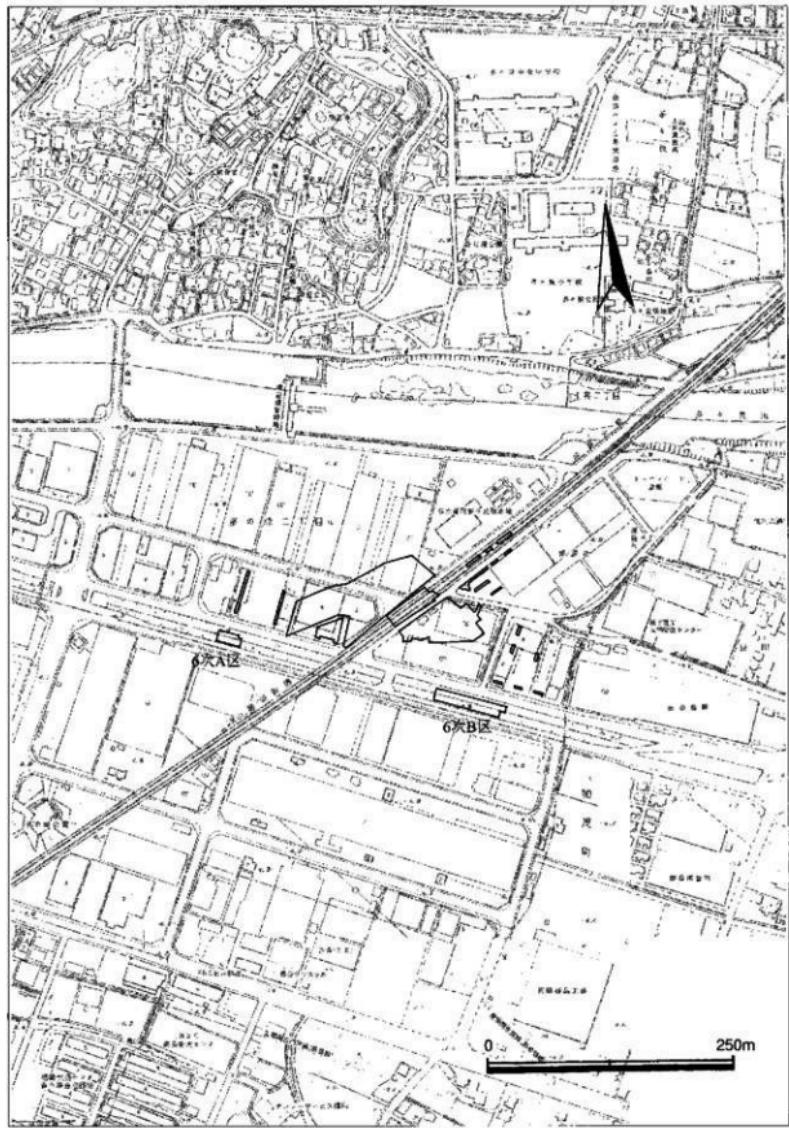
周辺の遺跡については発掘報告書に詳しいのでここでは割愛し、これまでの本遺跡群の調査成果について簡単に述べておきたい。多々良込田遺跡の調査は1972年の新幹線建設に伴う発掘調査に遡る。この第1次調査では弥生時代～平安時代の集落跡を検出している。続く第2・3次調査では官衙的配置を示す掘立柱建物群が検出された。出土遺物も越州窯系青磁・緑釉陶器・石帶等の一般の集落と明らかに異なり、遺構の特殊性を浮き立たせるものであった。第4・5次はトレンチ調査で遺構は認められなかった。第6次調査は外来系土器を多量に保有する弥生時代終末～古墳時代前期の集落（竪穴住居跡21棟）、古代の建物群・溝等は条理方向に配置が一致し、建物には規格性が認められる。また建物は何度も繰り返し立替えが行われたと考えられている。遺物は陶磁器、緑釉・灰釉陶器以外にも石帶、硯、青銅製装飾品、櫛等多数が出土し、容器類の優品の多さから官衙のうちの客館的性格を帯びた施設と考えられている。この事は当時海岸線が本遺跡群直前まで迫っていたとの復元成果と考え合わせると注目される点である。

III 調査の記録

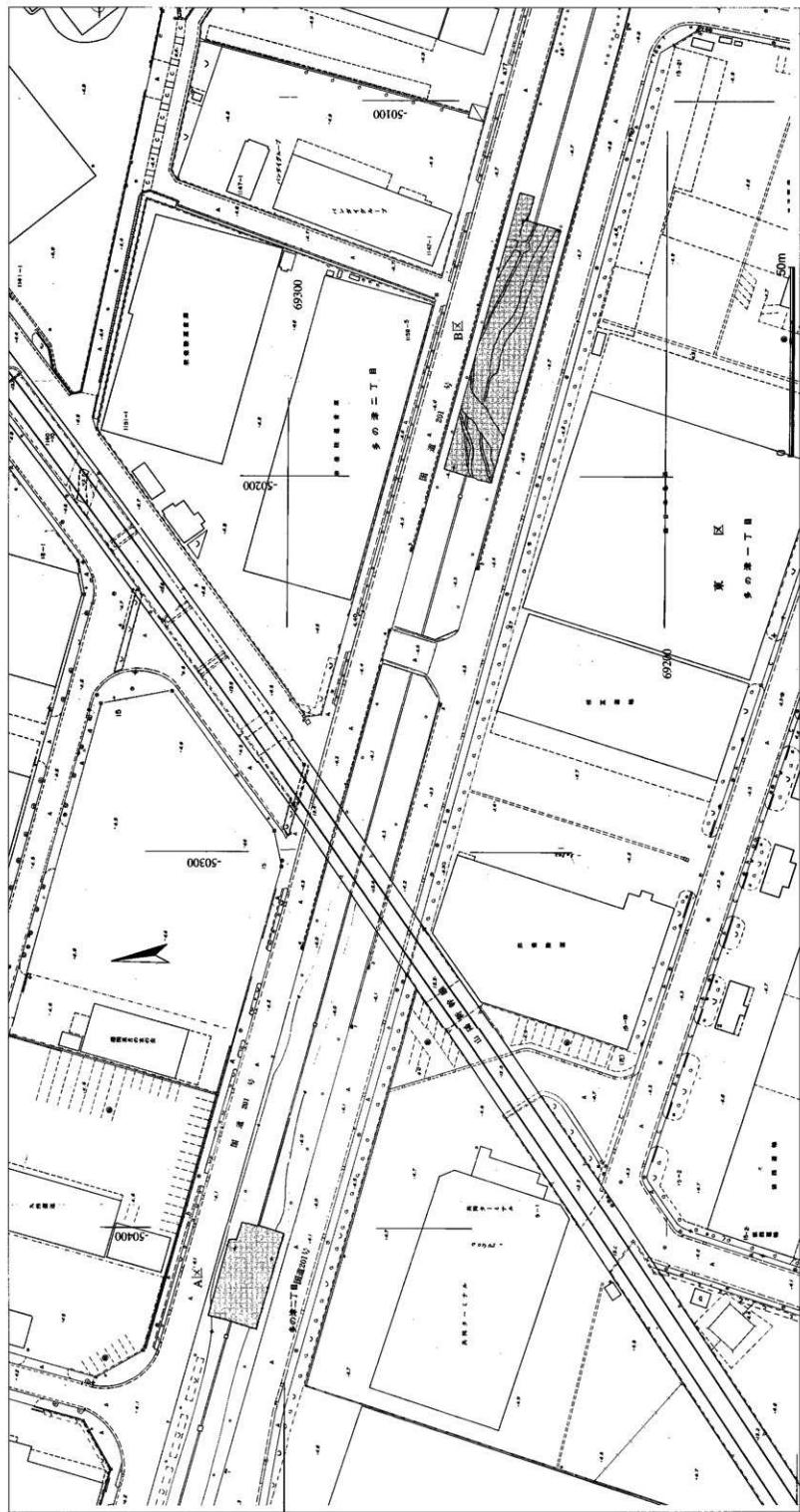
1. 調査概要

対象地は国道201号線中央の幅約18mのグリーンベルト部分で植栽を撤去した後に試掘調査を行った。試掘調査は船屋町との境から西に29本のトレンチを設定して行った。またこれより更に西側の申請地については甚類審査の結果多々良川の氾濫原と考えられるため遺跡なしと判断した。その結果新幹線を挟んで西側と東側に遺構が確認され、西側をA区（調査対象360m²）、東側をB区（調査対象1,620m²）として調査区を設定した。

A区は旧水田土の上に50cm程度の盛土を行っており、現況の標高3.9mを測る。水田土以下には厚さ15cmの床土がある。床土の下の黄褐色粘質土を除去した黄褐色砂質土が遺構面となっている。遺構面標高は2.8mを測り、検出遺構は掘立柱建物2棟のほかはピットである。遺構の密度は疎らである。また遺構面以下は暗黄褐色細砂・粗砂層の氾濫による堆積をなし、ここでは遺構は認められなかった。粗砂層中では磨滅の著しい夜刀式土器破片が出土している。B区も水田土の上に50cm程度の盛土を行っており、現況の標高4.4mを測る。耕作下以下は灰白色土・灰色土・黒褐色土が堆積し、遺構面は黄褐色シルトで標高は西側で3m、東側で3.4mを測り東から西に僅かに傾斜している。検出遺構にはピット、溝、井堰等がある。溝は弥生時代終末期～古墳時代に属するものである。古墳時代に属するSD004には井堰構築されている。また弥生時代終末期に属するSD005・008は調査区内を蛇行しながらほぼ平行に掘削されている。全体に遺物の出土が少なく、特にピットからはほとんど土器が出土していないため掘立柱建物等時期には不明な点が多く残っている。周辺の調査事例などから建物は古

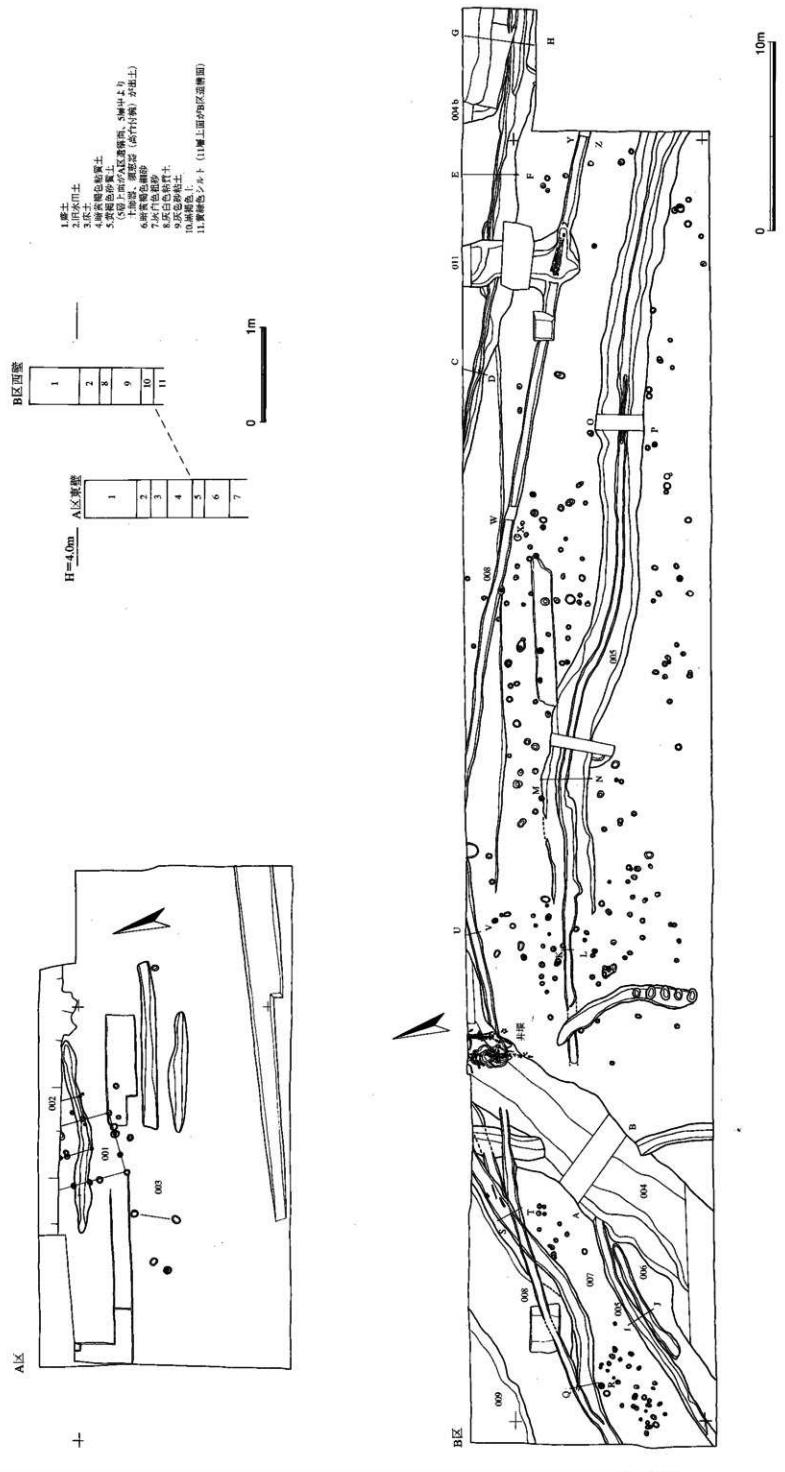


第2図 調査区位図 2 (1/5,000)



第3図 調査区位置図3 (1/1,000)

第4図 調査区全体図及C-E断面図(1/200、1/40)



代に位置づけられるものと考えられる。

また同様の試掘調査を柏屋町側でも行ったところ、湿地状の堆積を示し遺構・遺物は認められていない。調査地点は多々良川による沖積高地の南側の縁辺部分にあたり、対象地域内での遺構の広がりは比較的少ない範囲に止まっている。

2. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物(SB)

掘立柱建物はA区で2棟(1棟は不明)確認している。B区においてもピットの集中する部分があり掘立柱建物検討を行ったが建物として抽出する事が出来なかった。ピットからの遺物がほとんどなく時期は不明であるが、周辺の事例より古代に属するものと考えられる。主軸方位が6次調査建物と比べ 10° ほど西に振れている。

SB001(第5図)

A区中央で検出する。北側を調査区外にのばす掘立柱建物である。梁行3間(3.3m)・桁行3間以上(3.7m以上)をはかり、梁行柱間1.1m・桁行柱間1.4mである。また建物主軸方位をN -2° -Eのほぼ磁北にとる。柱穴は平面径20~30cmの円形を呈し、検出面からの深さは15~30cmである。

SB002(第5図)

SB001と重複するがピットの切り合はない掘立柱建物である。梁行2間(2.9m)・桁行2間以上(1.7m以上)をはかり、梁行柱間1.5m、1.4m・桁行柱間1.7mである。また建物主軸方位はをN -0° -Eの磁北にとり、SB001にはほぼ平行する。柱穴は平面径15cmの小型の円形を呈し、検出面からの深さは5~10cmである。SB001と一緒に建物を構成する柱とも考えられるが関連は不明である。

SB003(第6図)

A区中央部分で検出する。他のピットに比べて掘り方がしっかりと深さ40~50cmを測るピットが2基検出されている。柱穴埋土は暗褐色土で、柱心まで2.2mを測る。対応するピットはこの2基のみで、周囲にこれに伴うピットは検出していない。竪穴住居跡の主柱穴の可能性が高いが詳細は不明ため掘立柱建物の項で報告する。ピットから上師器壊破片が出土している。

出土遺物(第6図)

SP056出土である。小破片で細部は不明であるが上師器壊口縁部である。外面は横ナデによる整形を行う。胎土には径2mm程度の石英砂粒を多く含む。

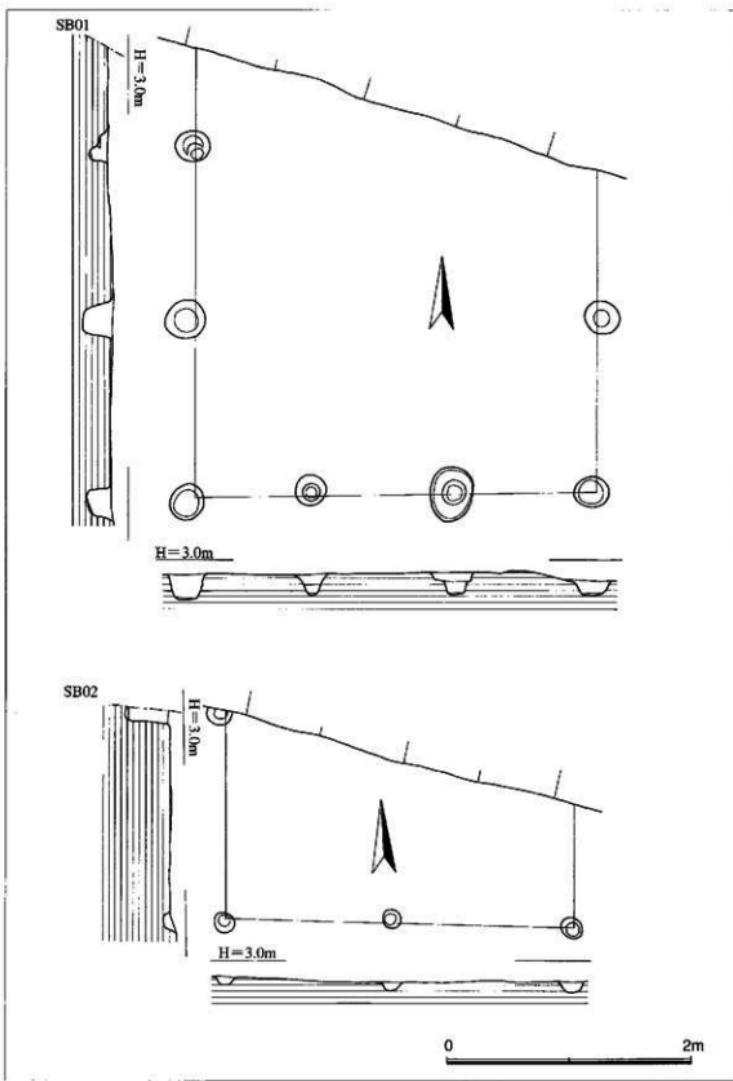
2) 溝(SD)

溝はいずれもB区で検出している。

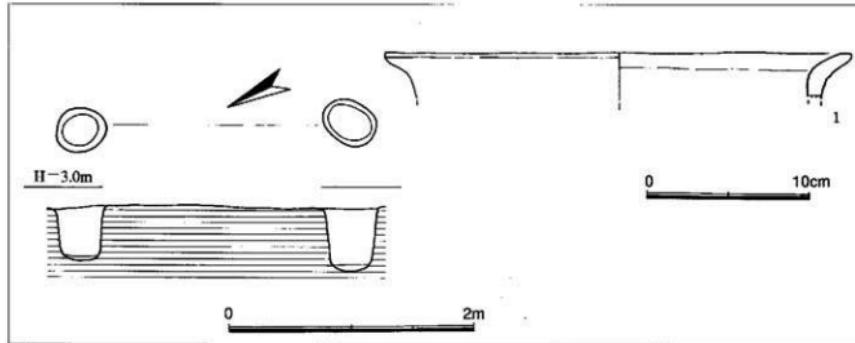
SD004(第7、8図)

B区西側で検出され、一旦調査区外に抜けたのち蛇行して北東部で再び検出される溝である。西側部分は溝幅4~5m、深さ50cmを測る。壁は非常に緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は細かな凹凸もなく、標高は約2.7mではほぼ平坦である。埋土は茶味を帯びた黒褐色粘質土で、埋土中に砂の流入は見られない。滞水したヘドロ状の堆積を示し、自然木・植物遺体が含まれていた。遺物には弥生時代中期~古墳時代後期の物が含まれている。

北端部分には井堰が構築されている。井堰は20cm程の幅で径10~15cmの縦杭を50cm間隔ほどで打ち込み、縦杭の間に横木を通して水をせきとめるものである。この他に溝岸近くの井堰南側では補助杭様の縦杭が密に打ち込まれている。この施設が東西に2列作られ、列間の間隔は70cm程度を測る。こ



第5図 SB001、SB002実測図 (1/40)



第6図 SB003及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)

の間の埋土は上層に粗砂を含み下半は黒褐色粘質土であり、杭列間に土砂を充填して強度をあげ、揚水性を高めたものと考えられる。また西側列の溝底面は列の真下を不整に掘り込んでいる。使用財はカン製で綫杭は先端が鋭利に裁断されているが横木は側枝を払っただけのものが使用されている。建築材等の転用は見られなかった。井堰内からは古墳時代前期の高坏・壺等が出上し、井堰の東隣では底面からやや浮いて籠状の編み物(写真参照)が出土している。

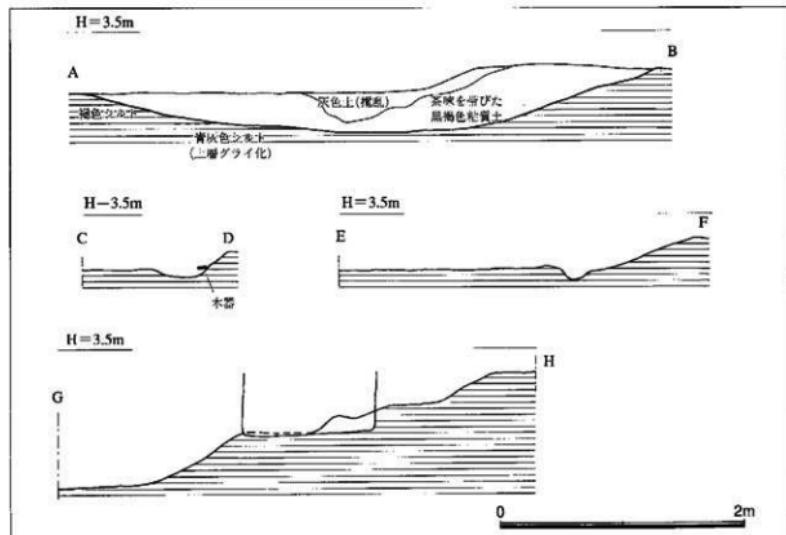
溝の延長は調査区北東部分で検出し、SD004bとして遺物の取り上げを行った。SD004bは東西方向に伸び、北壁は調査区外に出ている。埋土は茶味を帯びた黒褐色粘質土である。また壁の立ち上がりは緩やかで底面は平坦であるなど、埋土・形状が西側検出のSD004とはほぼ同様であるため一連の溝であると判断した。SD004bは西側で底面標高3m、東端では溝深が深くなり標高2.2mを測る。遺物では須恵器のほか木製の三叉鉄が出土している。

溝は微高地を蛇行しながら掘削されているが、埋土から見て基本的には滞水した状態であり常時水が流れていたものではないと判断した。また掘削・埋没の時期は出土遺物から弥生時代終末～古墳時代前期の掘削・古墳時代後期の埋没と考えられる。

出土遺物(第9図)

2～12はSD004、13・14は井堰内、15～18はSD004bの出土である。

2は須恵器壺蓋である。口縁部は直立し、天井部の境は僅かに張り出す。口縁端部内面は緩く窪む。天井部外縁の回転ヘラ削りは口縁部との境付近まで行われ、ロクロ回転方向は反時計回りである。3・4は布留式壺である。3は口縁部が外反して立ち気味に伸びる。胴部は外面が雑な斜め方向の刷毛目を施し、内面は反転部よりも下部から横方向のヘラ削りを行っている。屈曲部内面に粘土接合残る。5は口縁端部を内側に肥厚させる。5～8は直口の壺である。5は外面は縦刷毛を行う。内面口縁部は横刷毛、胴部は横方向のヘラ削りを施す。また屈曲部内面に接合痕が残る。6は胴部内面は押さえによるが、一部に刷毛目が残っている。7は胎土が精選されている。口縁部内面は横方向の磨きが行われる。頸部外面には刷毛目の上から押圧による三角形の刻みが施される。8～10は二重口縁壺の口縁部破片である。8は外面に波状文が残り、屈曲部外面は下方に垂下する。9・10は外面に帆繩文を施し、その上に竹管文を貼付する。11は頸部外面に帯状の粘土帶を貼り付け、網格子の刻みを施す。内面には縦刷毛を行う。12は高坏の筒部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向の指



第7図 SD004、SD004b断面図 (1/40)

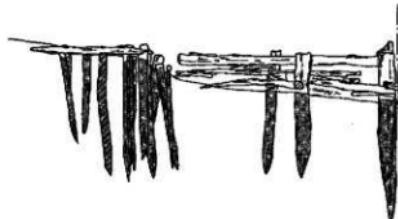
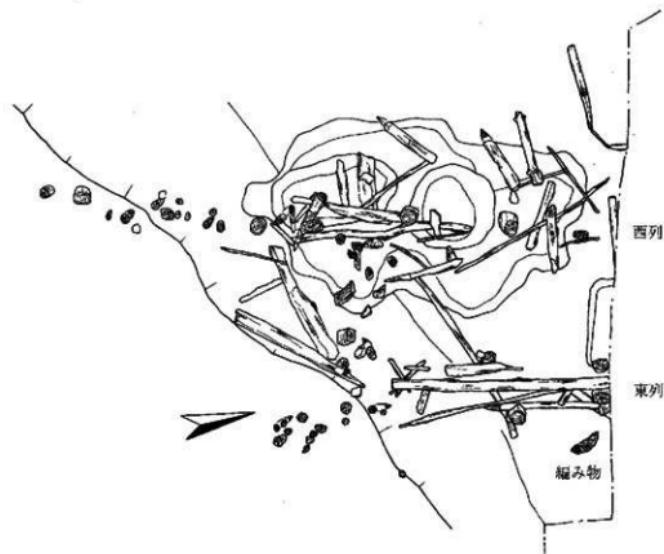
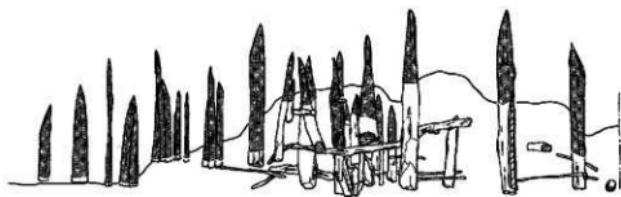
ナデを行う。

13は土師器壺の口縁部である。胎土は精選され雲母が多く含み、褐色を呈する。口縁端部は面取りを行い、嘴状に外方に引き出している。14は器台の脚部である。外面は縦刷毛、内面は螺旋状の横刷毛を行う。

15は須恵器壺身である。底部外面の1/2程に回転ヘラ削りを行う。受け部のかえりは短く内傾している。16は窓である。口縁端部は僅かに外方に肥厚する。外面は縦刷毛、窓部内面に横刷毛が施される。17は小型の楕である。胎土には径2~3mmの石英砂粒を多く含んでいる。内外面共に指ナデの後荒いヘラ削りを行う。18はおよそ半分を欠失した三叉鋤である。残存長32cmを測る。材の脆弱化が著しく、厚みも本来ものを失い、ほど穴部分も縁辺は失われている。

SD005(第10図)

B区調査区内を東西に蛇行しながら伸びる溝である。西側の一部をSD004に切られる。後述するSD008とは溝間の心々距離約5mでほぼ平行して伸びている。溝幅は西側で60cm、東側で2.2~2.6mを測るが、西側では削平により上部を失し、底部付近のみが残ったものと考えられ、東側の形態がより本来的なものを示していると考えられる。壁は緩く立ち上がり中央に一段箱形に深く掘りこまれる2段掘りをなす。埋土は粘質土を基本とし、粗砂の堆積は見られない。底面のレベルは標高3m~3.1mで全体にはほぼ平坦である。SD008の出土遺物が少なく時期的な関係が明らかではないが、位置関係から同時併存の可能性も高い。微高地の縁辺を巡る何らかの施設と考えられる。出土遺物・SD004との切り合い関係から弥生時代終末~古墳時代前期の遺構であろう。



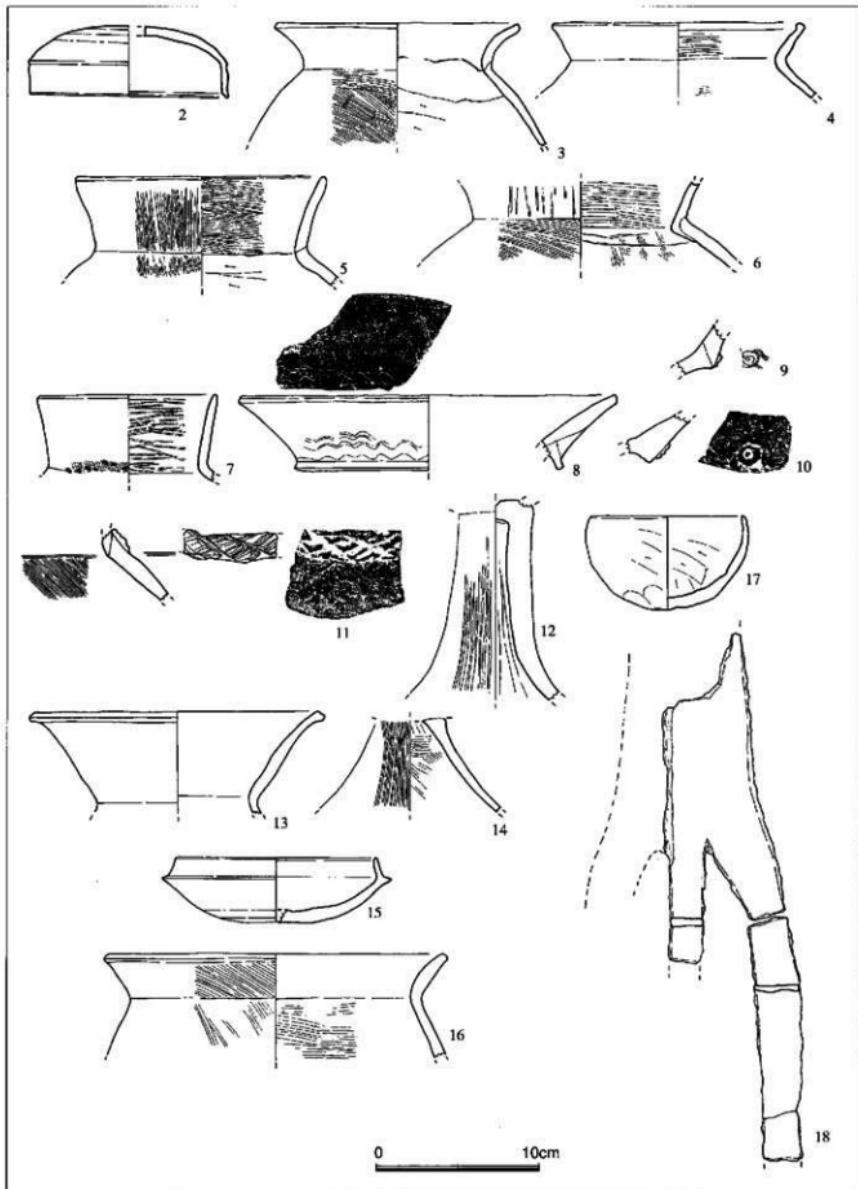
※アミ部は地山に打ち込まれていた部分

0 1m

青灰色シルト

粗砂

第8図 SD004内井堰実測図 (1/30)



第9図 SD004出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物(第11図 19 ~21)

19は壺の底部である。平底で胴部は擦過状に削りとりを行う。2次的に熱を受けており器壁が赤変している。20は脚据部の破片である。磨滅のため不明瞭であるが、外面には縦方向のヘラミガキが行われている様である。21は大型の壺である。口縁端部は面取りを行い、上方に僅かにつまみ上げる。内面はI縁部から頸部直下まで横方向の刷毛目を行い、胴部は縦刷毛の後に一部ナデ消している。外面縦刷毛を行い、頸部に刻み目を有する断面三角形の突帯を一条貼り付ける。

SD006(第10図)

B区西側で検出し、SD005に接して伸びる溝である。溝長は7mで、深さ5cm程度の浅い溝で立ち上がりも不明瞭である。埋土はSD005と同様の黒褐色土である。SD005の上段部分が削平を僅かに免れた可能性が高い。遺物は細片のみである。

SD007(第10図)

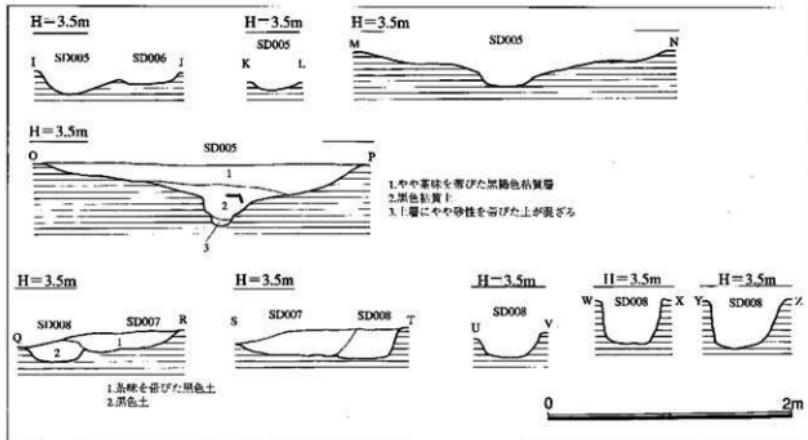
B区西側で検出し、SD008を蛇行しながら切る溝である。北端部で2方向に分岐するが、切り合いかの1連のものは不明瞭である。溝の幅80cm、深さ15cm程を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部分が窪み、やや凹凸を有する。遺物は小破片のみで、図示し得たのは弥生時代後期に属する壺破片のみであるがSD008・004との切り合いから古墳時代に属する遺構と考えられる。

出土遺物(第11図 22)

壺の底部である。底部は緩いレンズ状を呈する。胴部は内面には横刷毛を行い、外面は草束状の工具で削り取る。

SD008(第10図)

B区北側を東西方向に伸びる溝で、SD005とはほぼ平行する。また西側でSD004、007に切られている。埋土は黒色土で砂の堆積はない。壁は直に近く立ち上がり底面は平坦で、断面箱形を呈す。幅50cm、深さは西側で15cm、削平の比較的少ない東側で40cmを測る。底面標高は2.9m~3mでSD005とは同じであり、全体にはほぼ平坦である。遺物は僅少で時期を決め難いが、切り合いやSD005との位置的な関係から古墳時代前期以前の遺構と考えられる。



第10図 SD005、SD006、SD007、SD008断面図 (1/40)

SD011(第12図)

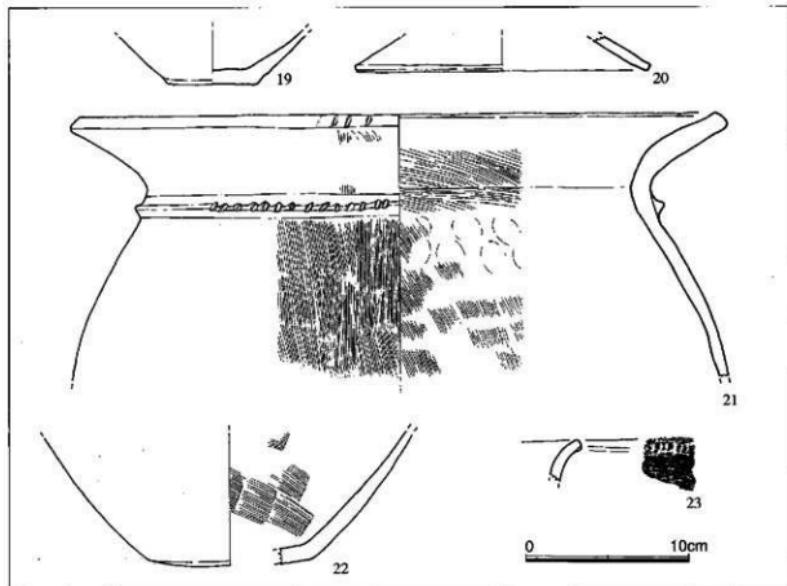
B区東側で検出する。北側上面をSD004bに切られている。幅2.6m、深さ80cmを測り、北側に向かって底面は緩く傾斜している。底面に凹凸はなく、壁もしっかり立ち上がっている。また南側壁はSD008と交わる辺りで立ち上がる。埋土は黒（褐）色で特に下位にいくに従い粘性を増している。注目されるのはSD008と交差する部分でSD008のライン上で自然木の表皮部分が楕状に内面を上部に向けて据えられている点である。平面的にはSD008との切り合い認められず、木の据えられていた位置・南壁の立ち上がりなどから考えてSD008に付随する施設と考えられる。水利を目的にした可能性も考えられるが機能・性格については全く不明であり、今類例を調べていきたい。遺物は僅か小破片のみである。

出土遺物(第11図 23)

弥生時代前期に属する甕の小破片である。胎土に砂粒を多くまじえ、色調は淡橙色を呈する。口縁部外面下端には刻み目を有する。固化できたのはこの1点のみであるが必ずしも遺構の時期を示すものではない。

3) その他の遺物(第13図)

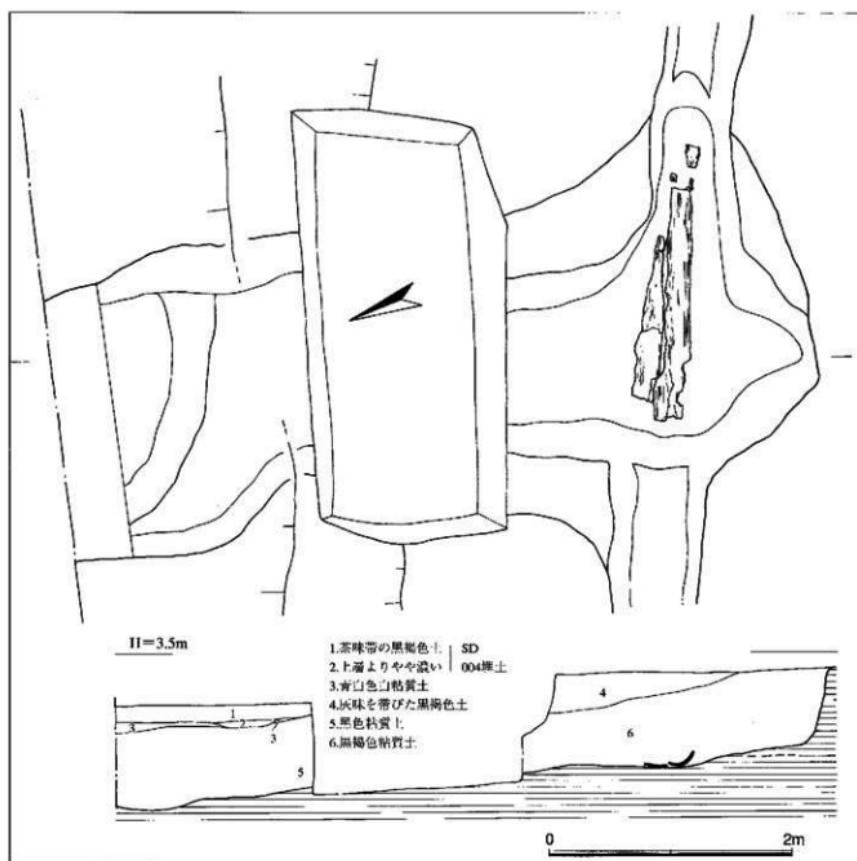
24~27は調査区北西隅で検出した微高地の落ち際に堆積した黒褐色土中から出土した遺物でいずれも弥生時代に属する。24は壺の口縁部である。25は楕の小破片である。胎土は精選されており、黄白色を呈する。26は甕の底部である。外底面は上げ底をなし、体外面には縱刷毛を行う。27は壺の口縁部で体外面に縱刷毛を施す。



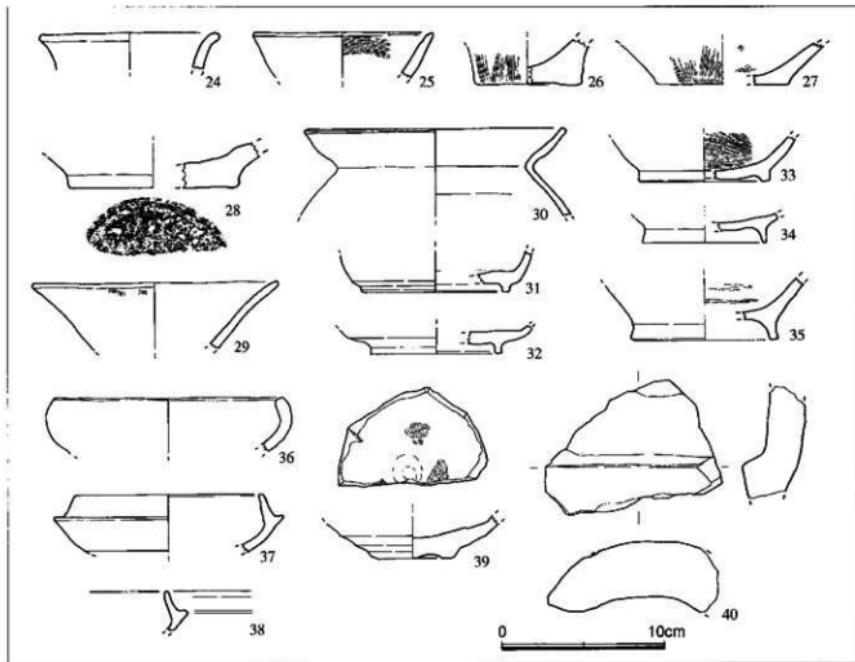
第11図 SD005、SD007、SD011出土遺物実測図 (1/3)

28~35はA区出土である。28は遺構検出面以下の大砂利層中から出土した壺の底部である。外底面に楕円形痕が残っている。29~32、34は遺構検出時に出土した遺物である。29は壺の口縁部である。胎土は精製され、淡桃色を呈する。35は布留式壺である。口縁部は比較的立ち上がり気味で端部のつまみ出しも見られない。31・32は須恵器の高台付き壺である。34は土師器の高台付き壺である。33・35は擾乱からの出土である。33は黒色土器A類の壺である。内面は黒色を呈し細かなヘラミガキを行う。35は土師器壺である。高台は高く立ち上がる。

36~40はB区の遺構検出時に出土した遺物である。36は袋状口縁壺の口縁部である。外面に赤色顔料が残る。37・38は須恵器壺身である。39は唐津系附器壺である。釉調は半透明の褐色である。内底面には砂目跡が3箇所に残る。40は丸瓦破片である。



第12図 SD011実測図 (1/40)



第13図 その他の遺物実測図 (1/3)

3) 小結

本調査は微高地の南側縁辺部分をトレンチ状に調査したもので、削平もあり遺構・遺物の検出は比較散漫な状態であった。時期の明らかなものとしては溝が弥生時代終末～古墳時代後期に位置づけられる。この中でSD005とSD008は弥生時代終末～古墳時代前期にあたり、溝心々で5mの距離をとつてほぼ東西方向に併走している。周辺の調査が困難である現状では遺構の機能については不明な点が多い、砂・粗砂等の堆積が見られないことから、水利的な施設でない可能性も考えられる。この場合集落に伴う施設・道路状の施設等が候補として考えられるが現時点では推測に過ぎず、今後類似する資料の収集に努めたい。

また近接する第2・3・6次調査に見られた古代の官衙的性格を帯びた遺構・遺物は今回は認められなかった。建物群の南限は第6次調査SD-24で画され、これ以後には施設の拡大は見られないと考えられる。

写 真



作業風景



写真 1 A区全景 (西から)



写真 2 A区検出掘立柱建物 (西から)



写真 3 SB001・SB002 (南から)



写真 4 B区全景1 (西から)



写真 5 B区全景2 (西から)



写真 6 SD004土層



写真 7 SD004内井堰1 (北から)



写真 8 SD004内井堰2 (南から)



写真 9 SD004内井堰3 (西から)



写真 10 SD004内井堰4 (西から)



写真 11 SD004内井堰5 (東から)

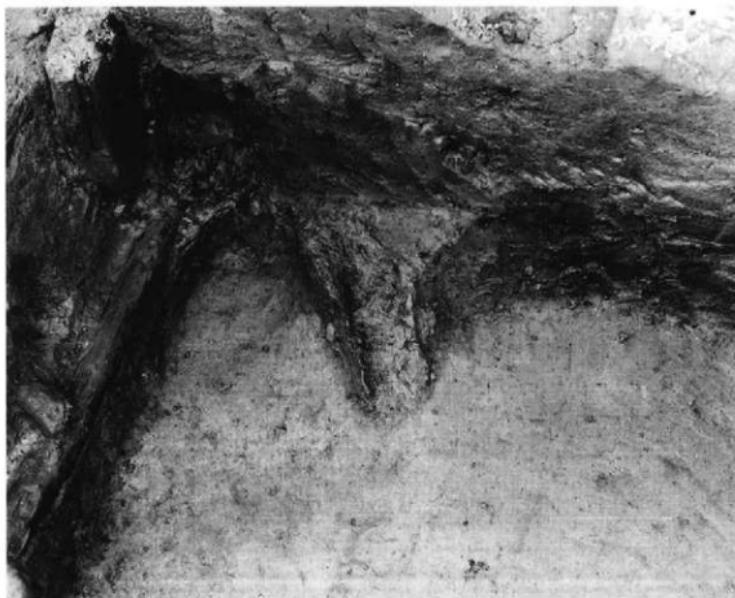


写真 12 SD004出土編み製品 (南から)



写真 13 SD004b出土鉢



写真 14 SD007・SD008上層



写真 15 SD011 (南から)

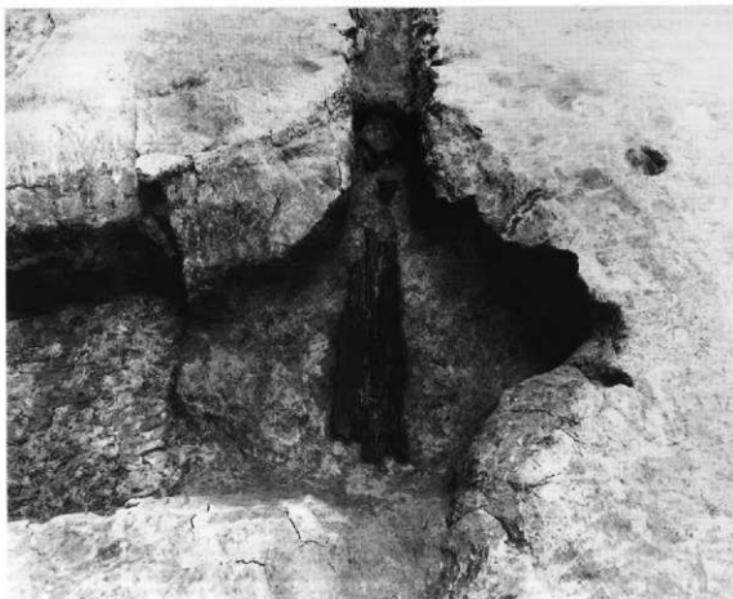


写真 16 SD011 (西から)



写真 17 SD011 (北西から)

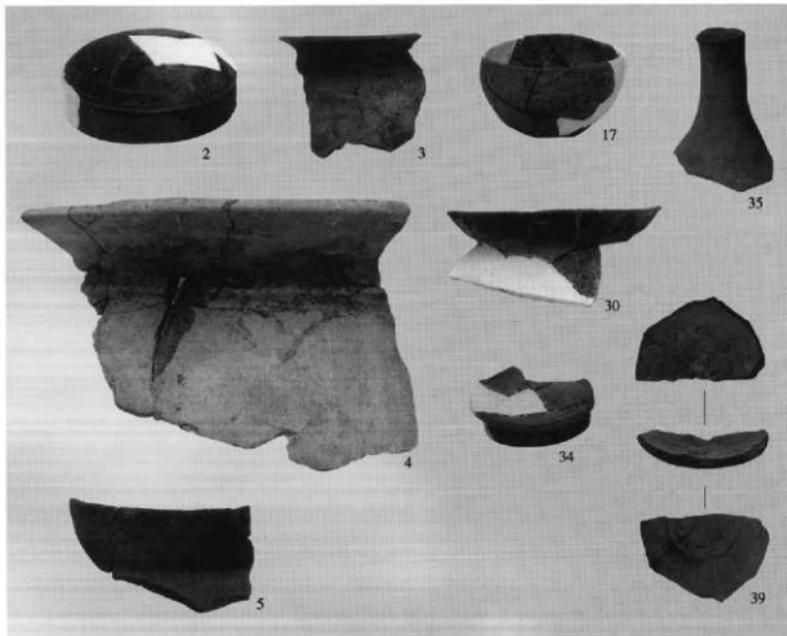


写真 18 出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書第549集

多々良込田遺跡IV

1998. 3. 13

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷(株)博多印刷

福岡市博多区須崎町8 5
